社会科学論集　第 171 号　2024. 6

広田先生の定年退職にあたって

経済学部長　井　原　　基

広田幸紀先生は，2018 年，国際協力機構から本学部に転任された。以降，6 年間という比較的短い期間であったが，本学部の教育と研究，そして大学運営に大きく貢献された。以下，先生の人となりのご紹介も交えながら，広田先生の教育研究面と大学運営面でのご貢献について述べさせていただく。

まず特筆すべきことに，広田先生は，本学部や研究科が長年力を入れてきた社会人大学院の修了生である。国際協力銀行のハノイやジャカルタ駐在員として，あるいは国際協力機構アジア・太平洋部長として，豊富な実務経験をお持ちであった広田先生は，2011 年に埼玉大学博士前期課程を修了された後，引き続き博士課程に進まれ，2014 年に東南アジア新興国の変容と我が国 ODA の変遷に関する博士論文を書き上げられた。先生のご研究は，開発経済学の分野で主流的に取り扱われてこなかった ODA を正面から扱い，特に先生が指摘した援助額の変動に関連する承諾と支出実行のタイム・ラグの問題は，ODA の実務出身者ならではの問題意識から生まれたものである。このような，実務的な問題意識と学術的な完成度の高さの両立は，埼玉大学経済経営系大学院の教育目標であると共に，広田先生の研究スタイルの真骨頂でもある。付言すると，埼玉大学で経済経営系大学院を修了し，埼玉大学の教員となった人物は広田先生がはじめてであった。

先生は，豊富な国際経験を買われ，英語による授業を担当する教員として本学部に採用されると，すぐに高い能力を存分に発揮した。先生は当時始まったばかりのグローバル・タレント・プログラム（GTP）の運営に携わり，英語で行う学部全体の必修科目である public policies では，英語力が十分な水準に達していない学生にも真摯に向き合い，補講も含めた取りこぼしのない英語教育のあり方を最後まで構想なさっていた。研究面では，埼玉大学の戦略的研究領域の一つである東アジア SD 研究プロジェクトの一員として，アジアの持続的発展性に関わる国際的な共同研究を発展させた。大学運営の面では，副学部長やメジャー長をお勤めになった。副学部長のお仕事については，詳しいことはおっしゃらなかったが，揉め事が多く，苦労なさっていた様子はうかがわれた。私と先生との間の共通の体験は決して多くはないが，その中でも良い思い出の一つは，台湾の高雄で行われた国立中山大学とのワークショップである。海辺の素晴らしい環境にある中山大学のキャンパスや夜の屋台を巡りながら，趣味のスキューバーダイビングや国際協力銀行時代の思い出話を伺い，広田先生の普段のご様子とはまた違ったアクティブな一面も知ることができた。

このように 6 年間，大変多くのご貢献をして頂いたが，これは先生の高い専門能力や語学力だけでなく，真摯でバランスの取れたお人柄にもよるものである。しかし広田先生に頼るあまり，多くの仕事をお任せするだけでなく，大学業界特有の些末な議論に巻き込んでしまい，ご負担をかけてしまったことは，学部として大いに反省すべきである。先生のような高い能力を持つ専門家に，いかに気持ちよく働いていただくかは，これからの学部運営の課題でもある。

大学の様々な仕事から解き放たれた広田先生には，今後はご研究と社会貢献に邁進していただきたい。これからも健康に留意され，変わらぬご活躍を続けられるよう，祈念申し上げる。